

幼児はどのようにして「死」に気づくのか

— テキストマイニングによるエピソードの分析 —

Young Children's Realization of Death

杉 山 幸 子

要約 本論では、保育所と幼稚園の保護者から、子どもが「死」について話したエピソードを収集し、その内容をテキストマイニングとコレスポネンス分析によって分析した。その結果、子どもが死に関心をもつきっかけとして6つの変数を確認し、関心のあり方としては、死への関心、死者への関心、未来の死（への気づき）の3つのパターンを見いだすことができた。死者への関心が死の理解に進むケースでは、親の応じ方が子どもの死生観の形成につながる重要な要因であることが分かった。また、親や自分の未来の死への気づきは、加齢の認識という認知的発達と関連していることが窺われた。

問 題

子どもが「いのち」や「死」をどのように認識しているかという問題が近年注目されている。その背景には、子どもや青少年の自殺、深刻ないじめ、犯罪が頻発しているという社会情勢がある。このことから、いのちの重さや死の意味を理解していない子どもが増えていのではないかと懸念する声が多く聞かれるのである。

もし、子どもが変わっているとしたら、それは社会が変わっているからに他ならない。そうした要因としては、テレビやマンガ、ゲームの世界において「偽物の死」が氾濫してい

ること、家族形態の変容や平均寿命の伸び、病院での終末期医療の普及によって、子どもが近親者の老化や死に身近に接する機会が少なくなっていること、都会でも田舎でも自然の中でいのちに触れながら遊ぶことが難しくなっていることなどが指摘される。

こうした問題意識を背景として、最近では教育現場でさまざまな「いのちの教育」が試みられているが、子どもの死生観を育む場が本来家庭であることは間違いないだろう。杉山（2010）は幼い子どもを有する現代の家庭において、いのちの学びがどのように行われ

ているかに注目し、墓参りや葬儀への参列を中心とした宗教的パターン、生き物の飼育や絵本の読み聞かせなどの幼児教育のパターン、テレビなどのメディアを媒体としたパターン、親から子への語りかけのパターンの4つを見出した。

本論で注目するのは、このような社会状況の下で、現代の子ども（幼児）がどのようにして「死」を理解するのかという問題である。

日本において、子どもの死生観に注目した研究はいくらか行われてきたものの、決して多くはなかった（相良-ローゼマイヤー, 2005）。なかでも幼児に注目した研究は少ないのが現状である。幼児期は現実と非現実の知識が入り混じり、生と死は未分化である（仲村, 1994）ともいわれるが、幼児期において死の理解がどのように進んでいくかをきめ細かく調べた研究も最近では行われてきている（竹中ら, 2004; 辻本, 2010）。こうした研究においては、死の理解の指標として、不動性（死ぬと身体的・精神的活動が停止する）、不可逆性（死んだ者は生き返らない）、普遍性（生命ある者には必ず死がおとずれる）の3つの概念が使用されることが多い（Speece and Brent, 1984）。

子どもの死の概念は年齢とともに変化し、絵本、テレビ、親や先生の言葉などさまざまなものに影響され、形成されると考えられる。したがって、死の概念が獲得されているといっても、単なる知識としてそれを身に付けているに過ぎないかもしれない。だが、いのちの大切さを理解する上で重要なのは、それが与えられた知識ではなく、リアリティのある「生きた」知識になることだろう。西平（1987）は、「子どもの心のなかで、死はどの

ように体験され、どのように理解されているのであろうか。子どもは、何時、どのような仕方、自らの生を〈1回限り、終わりのある、私だけの生〉として自覚するのであろうか」と述べるが、本論で注目するのはまさにこうした問題である。

この問いに対する実証的なアプローチとしては、子どもが死を理解するきっかけとなりうる経験を独立変数として取り上げ、従属変数である死の概念の獲得に差が見られるかどうかを検討するという方法が考えられる。濱野（2008）はこの方法によって、ペットロス経験がある幼児は経験がない幼児よりも死の「非可逆性」を理解している者が多いことを示した。ここで検討されたのはあくまで正解者の量的な差であり、理解が「本物」であるかどうかを調べたわけではない。だが、ペットロスの経験以外に大きな違いがないと仮定するならば、ペットロスを経験した子どもの方がそうでない子どもより「正しく」答えられるということ、理解の質的な差と読み替えても的外れではないだろう。したがって、こうした方法によって、何が死の理解を深めるのかを検討することもできるだろう。

しかし、子どもの「死」の感じ方、理解のし方を明らかにしようとしたら、まず、子どもの体験そのものに迫ろうとする試みが必要であろう。そのために、ひとつには、自由度の高いインタビューという方法がある。ただし、死をどのようにとらえているかを言葉で表現することは大人でも容易ではなく、子どもの場合はなおさらである。この点を補うために、インタビューに加えて絵を描かせるなどの方法をとった研究が行われている（相良-ローゼマイヤー, 2004, 2007; Wenestam,

1984)。

さらに、子どもをよく知る周囲の大人から、死にまつわるエピソードを聴きとるという方法が考えられる。尾上 (1998) は保育者と親を対象に自由記述のアンケートを行い、子どもが「死」を体験する姿についての貴重な資料を集め、小動物の死、老人の死、兄妹や肉親の死の3つを重要な要因として取り上げている。

本研究では、子どもが「死」に気づく経験にアプローチする方法として、尾上 (1998) と同じく自由記述のアンケートを用いる。すなわち、そうした経験に関するエピソードを収集し、子どもが死に気づくきっかけ、死の理解のあり方について考察する。分析の方法としてはテキストマイニングとコーレスポネン分析を使用し、考察のための足がかりとしたい。

方 法

1. 調査の概要

エピソードを収集するための調査は2回行った。1回目は2006年、盛岡市と八戸市の保育園各1園の保護者を対象に質問紙調査を行った。回収数は合わせて96通であった。2回目は2008年、八戸短期大学附属幼稚園の保護者を対象にやはり質問紙調査を行った。回収数は107通であった。この2回の調査では、エピソードを尋ねる以外の質問を行っており、その内容は回によって異なっている。

エピソードを尋ねる方法にも若干の変更があった。保育園での調査では、「子どもに『私もいつか死ぬの?』『死んだらどうなるの?』など、死にまつわる質問をされたことがあったら、その状況 (年齢、内容、親の対応など) について」詳しく記すよう求めた。2年後の幼稚園での調査では、調査者の方で前もってエピソードの種類を (a) 「人の一般的な死」、(b) 「具体的な誰かの死」、(c) 「自分の死」に分け、それぞれ子どもが話すのを聞いたことがあるかどうか、ある場合は一番早い時で何歳頃だったかを尋ねた。それから、その内

容について、どんな言葉だったか、どんなきっかけがあったか、どのように応じたかなど、状況をなるべく詳しく記述するよう求めた。

このように質問の仕方が異なるため、厳密にはいっしょに分析すべきではないかもしれないが、自由記述である点は同じなので、ここでは両方をまとめて扱うことにした。回収した質問紙にはエピソードに関する記述がないものも多く、記述が見られたのは全部で

表1 エピソードの年齢

年齢	度数
5歳	25
4歳	23
3歳	21
6歳	8
7歳	4
3~4歳	3
2歳	3
5~6歳	1
5~7歳	1
9歳	1
計	90

97通だった。

エピソードには年齢が記されていないものもあったが、年齢が分かるもの90件についての度数を表1に記した。在園児のきょうだいを含めて思い出してもらうように求めたが、就学後のエピソードはほとんどなく、3歳、4歳、5歳時のエピソードが大半を占めた。

2. 分析の方法

杉山(2010)と同様、テキストマイニング手法を用いて分析を行った。まず、すべてのエピソードをエクセルに逐語入力した。その際、ひとりの回答者が複数のエピソードを記述している場合は、エピソードごとに分割して入力した。そのデータをIBM SPSS Text

Analytics for surveys Japanese 4にインポートし、キーワード(単語)の抽出を行い、抽出されたキーワードを吟味して手作業でカテゴリ(変数)を設定した。また、キーワードに依拠せず、エピソードの内容から筆者が独自に構成したカテゴリもある。したがって、カテゴリの設定はプログラムによる辞書的な基準ではなく、筆者の判断によるものである。また、エピソードにキーワードが含まれていても、文脈によってはカテゴリに適合しない場合も多いので、カテゴリが当てはまるかどうかは一つひとつのエピソードの内容を見て判断した。逆に、キーワードを使用していなくても、内容がそのカテゴリに当てはまると判断したエピソードも少なくなかった。

結 果

作成したカテゴリは表2に示す通りである。カテゴリは少なくとも2件以上のデータ

に当てはまるものとしたため、エピソードの中には複数のカテゴリに相当するものがある

表2 エピソードから抽出したカテゴリ

	カテゴリ	内容	度数
きっかけ	身内の死	家族や身近な人の死に接したこと	32
	テレビ	ドラマやニュースを見て	12
	葬儀	葬儀や火葬に参列したこと	9
	写真	亡くなった人の写真を見て	7
	ペット	犬やハムスターなどのペットを亡くして	6
	病気	自分の病気	2
関心のあり方	死者への関心	特定の死者に関する発言	35
	死への関心	死や死後に関する発言	35
	未来の死	将来起こりうる死に関する発言	18
	自己の死	自分の死に関する発言	11
その他	加齢	加齢への気づき	13
	ママの喪失	自分の母が死ぬことへの気づきや恐れ	15

表3 エピソードの例

番号	エピソード	関連するカテゴリ
7	2、3歳の頃、おじいさんが死んでしまうドラマを見て、「ぼくのおじいちゃんも死ぬの?」「何で人は死んでしまうの?」と聞かれた。人間は自分のやるべきことや、人の役に立つことを全部やったら命が終わる時がくることを教え、2冊の本を読んであげた。	死への関心 テレビ
17	3~4歳の間、「人は死んだら骨になるんだよねー」って言ったり、「お星様になるんだよねー」と言っていた時期があった。それに対して、「そーだね」って言って、特に何も。	死への関心
51	仏壇の写真を見て、「じいちゃんとはあちゃんは、何で写真なの」と聞かれ、「病気で死んじゃったんだよ」と答えました。飼っていたハムスターが死んだ時、「天国にきちんと行けたかな」と話してました。(3歳)	死者への関心 写真 ペット
64	おばあちゃんが亡くなって遺影を見た時に「何で写真になったの?」「どこ行っただの?」と聞かれました。亡くなった事(頃?)は息子はまだ2歳過ぎたばかりでありよく理解していなかったようですが、3歳過ぎたあたりから、聞くようになりました。「ばあちゃんはお空の国に行っただよ」「お空からちゃんと見て守ってくれてるよ」などと言って教えています。(3歳)	死者への関心 死への関心 写真
14	3歳の頃、母方の父と父方の父が立て続けに亡くなった時、「死ぬと息ができなくなってもう会えなくなるの?」と聞かれた。じいちゃんに会えなくてさみしいと言って、お星さまになったんだねと、たまに思い出したように言ったりする。じいちゃんのことを忘れないでいたら、きっとじいちゃんは喜んでと思うよと話した。	死者への関心 死への関心 身内の死
70	長男が3歳の時にひいおじいちゃんが亡くなり、火葬、葬儀に参列しましたが、火葬の時に「おじいちゃん、お空に行ったね」と自分から言うてきました。通夜の夜空はとてもきれいで星がすぐ近くにあるかのように大きく輝いていました。それを見て「おじいちゃんはお星様になったんだね」と言うていました。4歳になってからその時のことを自分から話し出し、ひいおじいちゃんが死んだことをきちんと認識していること、葬儀等のことも克明に覚えていることを話してくれました。6歳になる直前にひいおばあちゃんが亡くなりました。昏睡状態のひいおばあちゃんの手をずっと握りしめていました。臨終の場にもいましたが、「おばあちゃん、ご苦労さま。おじいちゃんが迎えに来てくれてよかったですね。二人でいっぱいお話してね」と語りかけていました。今でも空を見上げて「今日も見守ってくれてありがと」とよく言うています。「どうしていなくなっちゃったの?」と聞かれ、「頑張って生きてきたから神様のところへ行っただ」と答えると「よかったですね。寂しくなくて」と言うていました。(4歳)	死者への関心 死への関心 身内の死 葬儀
82	・上の子が3~4歳頃、曾祖父が亡くなり、棺桶に入っている曾祖父を見たり、火葬にも参加し、今まで生きていた身近な人が死ぬことを体験したことがきっかけとなり、その後の生活の中で、「おじいちゃんは骨になったの?」「どこへ行っただの?」「死んだの?」などと言うようになった。「死ぬとどうなるの?」に対しては、「お話しできなくなるし、ごはんも食べられなくなる」「お墓の中に骨になって眠っている」「天国に(空に)行って見守っている」等と答えた。「死ぬと痛い?」と聞かれ、「死ぬと、痛くないけれど、生きてる皆とお別れしないと(離れないと)いけなくなる」と答えた。	死者への関心 死への関心 身内の死 葬儀
6	4歳前位に「人はどうして死んじゃうの?」と聞かれ、父親は「おもちゃも古くなるとだんだん壊れてくるでしょう?人も長く生きてるといろんなところがだんだん古くなってきて壊れてしまうんだよ」と答えていた。「自分も死んじゃうの?」と聞いて涙ぐんでいたが、「まだ新しいからだいぶ先のことだから大丈夫だよ」と説明していた。一方母親は「死んじゃったらもう生きてる人とは会えなくなるけれど、お星様の世界に行くんだよ」と説明している。	死への関心 自己の死
13	最近(4歳)「ママもパパもおばあさんとおじいさんになって年を取ったら死んでしまうんだよね」と言われて、「まだまだ死なないよ」と答えた。	未来の死 加齢 ママ
27	ぼく100歳になったら死んじゃうの?→100歳になっても元気に生きてる人もいるんだよ。(6歳)	自己の死 加齢
69	お母さんが死んだらやだ~! 私も大きくなったら死んじゃうの? いやだ~!! みんなも死んじゃうの? いやだ~!! “じゃあ何の為に生きてるの?”←こういうニュアンスの事も尋ねてきては毎晩泣き寝入りをしてくり返しました。その時は、「お母さんは死なないです」とくり返してはなぐさめた。大きくなって自分に大切な人ができて、家族ができる頃には、心がうんと強くなってるし、みんなが乗り越えてきてるし、天国もとっても素敵なところよ、というふうに教えた。	未来の死 自己の死 加齢 ママ

一方で、どのカテゴリにも相当しないものもあった。このため、最終的に分析に使用したエピソードは88個となった。エピソードの例とカテゴリを表3に示す。

カテゴリの中で、子どもが死に気づききっかけに当たるものは6つあった。最も多かったのは「身内の死」であり、これは「おばあちゃんが亡くなったとき」のように、家族や身近な人が亡くなった際のエピソードであることを示す。全部で32のエピソードがこれに当てはまったが、そのうちの9つは子どもが葬儀や火葬を経験した際のエピソードであり、それについては別に「葬儀」のカテゴリを作成した。したがって、「葬儀」カテゴリはすべて「身内の死」カテゴリと重複している。また、「写真」は亡くなった人の写真を見たときに何らかの発言があったケース、「ペット」は死んだペットへの言及があったケースを意味する。さらに、「テレビ」はドラマやニュース、ドキュメンタリー等で人の死が取り上げられるのを見た際に何らかの発言があったケースであり、これは「身内の死」に次いで件数が多かった。「病気」に当てはまるエピソードは2つだけで、どちらも自分が病気で具合が悪くなったときに死への不安を口にしたものである。

関心のあり方に関するカテゴリとしては、4つを設定した。まず、「死者への関心」は亡くなった特定の人に言及したエピソードであり、これは「身内の死」「葬儀」「写真」などのきっかけと関連していることが多かった。具体的には、「(亡くなった)おじいちゃんはどこにいるの?」のような発言である。図1に示す通り、このタイプのエピソードは3歳で既に多く見られていた。これに対して

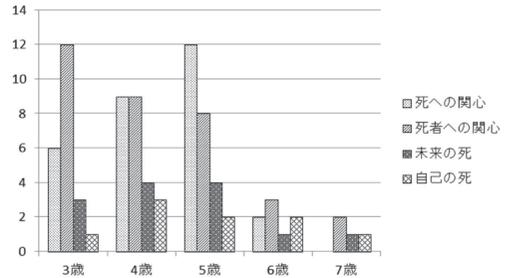


図1 年齢とエピソードの種類

「死への関心」は、「死んだらどうなるの?」「どこへ行くの?」のような死への疑問や、「死んだらお星様になるんだよね」のような死についての知識が現れたエピソードであるが、「おじいちゃんはどこにいるの? 死んだらどうなるの?」のように、「死者への関心」と関連して生じた場合も少なくなかった。「死への関心」は3歳から5歳にかけて増加していた。

一方、「未来の死」は現在生きている人が「いつか死ぬの?」「死んじゃ嫌だ」といった発言であり、対象者は自分と他者に大別できる。このうち「自分の死」はカテゴリとして独立させた。また、エピソードの記述者の多くが母親だったせいもあるだろうが、言及された他者としては母親が最も多かったため、やはり「ママの喪失」をカテゴリとして独立させた(どちらも「未来の死」と重複している)。さらに、他者の「未来の死」に関連するエピソードを読むと、「ばあばは年をとっているよね? じゃあ死ぬの?」「ママが先に死んじゃうんでしょ」のように、年をとることや死ぬ順番に触れたものが多く、これについては「加齢」として独立させた。

これらの作成したカテゴリに「当てはまる」「当てはまらない」を「1・0」の2値データ

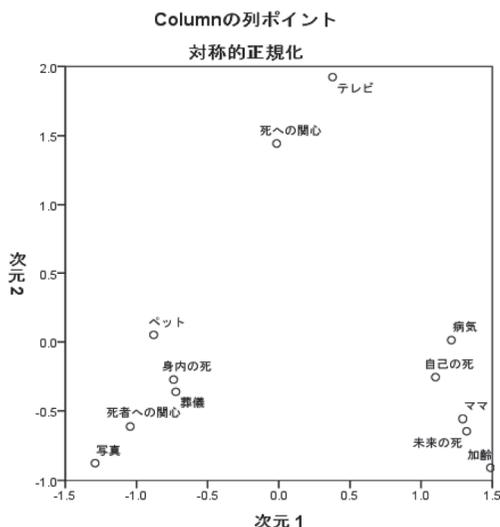


図 2 カテゴリの布置図

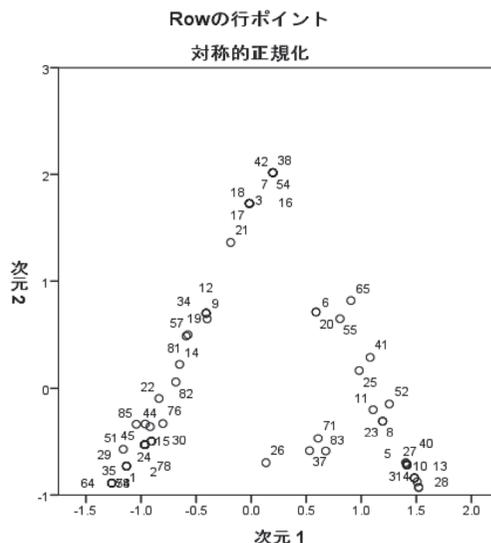


図 3 エピソードの布置図

としてエクスポートし、コレスポネンス分析（IBM SPSS Statistics 21 を使用）を実施した結果を図 2・3 に示す。この 2 次元での説明率は 38.5% であった。図 2 はカテゴリ、図 3 はエピソードの布置図であり、この 2 つは重ね合わせるができる。

図 2 により、カテゴリは死への関心、死者への関心、未来の死の 3 つのパターン（因子分析でいう「因子」に相当する）にまとめられることが分かった。すなわち、テレビをきっかけに死に関心を示すパターン、身内の死、

葬儀、死者の写真、ペットの死をきっかけに死者に関心を示すパターン、病気をきっかけに自分の死を考えたり、加齢を意識したことから母などの他者が将来死ぬことに気づいたりするパターンである。ただし、図 3 を見ると、エピソードがほぼ三角形上に布置しているため、この 3 つのどれかに典型的に当てはまるものだけでなく、2 つずつを組み合わせたパターンに当てはまるエピソードも少なくないことが分かる。

考 察

本論では、幼児の保護者から子どもが死に関係する発言をした際のエピソードを収集し、それを基に子どもが「死」にどのように気づいていくのかを明らかにすることを目指した。自由記述のため、集められたエピソード

は、ごく簡単なものから詳細に描かれたものまでさまざまであったが、テキストマイニングとコレスポネンス分析によって、そこから死への気づきの 4 つのパターンを見いだすことができた。

ひとつは、具体的な誰かではなく、死一般に関心を示すもので、いわゆる「第三人称の死」の理解に当たり、典型的には表3の7番や17番のエピソードがそれに当たる。17番においては、子どもは単に知識として死を「知って」いるに過ぎず、いわば「気づき以前」の段階にあるといえよう。親もそれに対して特に働きかけをしていないため、ここではそれ以上の深化は生じていない。これに対して、7番では子どもの関心に応じて親が丁寧に説明したり本を読んであげたりしているため、直接に死に接してはいなくても、子どもがもう少し理解を深めた可能性がある。死への関心は3歳以前というごく早い時期から生じうるため、そうした場合に親が適切に応じられるよう、保育所や幼稚園で良い絵本を紹介することは役に立つのではないだろうか。

しかし、死への気づきとして興味深いパターンは、身近な人の死を経験したことによる、いわゆる「第二人称の死」の理解である。表3の51番では、祖父母の遺影に関心を示したことが記されているだけだが、その際に親が天国について話したためか、その後のペットのハムスターの死を「死んだら天国に行く」という形で受けとめている。64番のエピソードには、幼児に向けた死者についての親の語りが典型的に示されているといえよう。また、14、70、82番のエピソードを読むと、家族の死を身近で経験すること、そして、親が死と死者について語って聞かせることで子どもの死生観が形成されるということが、ひしひしと伝わってくるように思われる。特に、70番のエピソードの子どもは、曾祖父の死を経験したことで、次の曾祖母の臨終をととても自然な温かい態度で受けとめること

ができており、家族の年長者の死を年少のものが見送るという、かつては当たり前だったことの大切さが改めて示されているといえよう。

さらに、「第一人称の死」といわれる、自分がいつか死ぬということへの恐れを伴う理解が含まれるのが「自己の死」のパターンである。自己の死については、病気の時に「ぼく死んじゃうの?」と言ったケースや、特にきっかけなく「ぼくが死んだらどこに行くの?」と口にしたというケース、祖母の葬式で「自分もその年になったら死ぬの?」と聞いたというエピソードもあった。一方、6番のように、死への興味から発して、親との対話の中で自己の死への気づきにつながったというエピソードもあり、やはり、死の理解においては親の応じ方がキーとなることがうかがわれる。

また、それとは別に興味深いのが、「加齢」もしくは「ママの喪失」が「未来の死」と関連したパターンである。13番のように父母や祖父母の加齢、27番のように自分の加齢の認識が未来の死への気づきとつながるケースがあり、それが最も端的に表れているのが69番のエピソードである。ここでは最も身近な他者である母の加齢と未来の死、そして自分の未来の死への気づきが激しい恐れとともに表現されている。自己の死への気づきは上述のように身近な他者が亡くなったことから生じることもあるが、むしろ、特にきっかけらしいものがなく、加齢への気づきと関連して生じていることが多い。これは、子どもの死の理解には環境の要因だけでなく、加齢の認識という認知的要因が影響していることを示しているといえよう。加齢の認識は時間

的展望、時間的拡張自己などの概念と関連し 検討課題である。
 ていると考えられ、この点については今後の

引用文献

- 濱野佐代子 2008 幼児の動物の死の概念と、ペットロス経験後の生命観の変化に関する研究
 —幼児の死の概念とペットロス経験の関連— 発達研究, 22, 23-36.
- 仲村照子 1994 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5(1), 51-71.
- 尾上明子 1998 「子どもと死」の問題～子どもといっしょに、どのように「死」を生きることが可能か～ 名古屋柳城短期大学研究紀要, 20, 91-108.
- 相良-ローゼマイヤー みはる 2004 子どもの死と死後の世界観：解釈学的現象学を用いて
 日本看護学会誌, 24(4), 13-21.
- 相良-ローゼマイヤー みはる 2005 日本の子どもたちの生と死の概念研究レビュー—生活
 世界 (life world)— 小児看護, 28(6), 782-787.
- 相良-ローゼマイヤー みはる 2007 子どもの死の感じ方 小児看護, 30(13), 1797-1809.
- Speece, M.W. & Brent, S.B. 1984 Children's understanding of death: A review of three
 components of a death concept. Child Development, 55, 1671-1686.
- 杉山幸子 2010 家庭における幼児期の「いのちの学び」について 八戸短期大学研究紀要,
 33, 13-24.
- 竹中和子・藤田アヤ・尾前優子 2004 幼児の死の概念 看護学総合研究, 5, 24-30.
- 辻本 耐 2010 幼児期における死の概念の発達的变化 大阪大学教育学年報, 15, 57-69.
- Wenestam, C.G. 1984 Qualitative age-related differences in the meaning of the word
 "death" to children. Death Education, 8, 333-347.